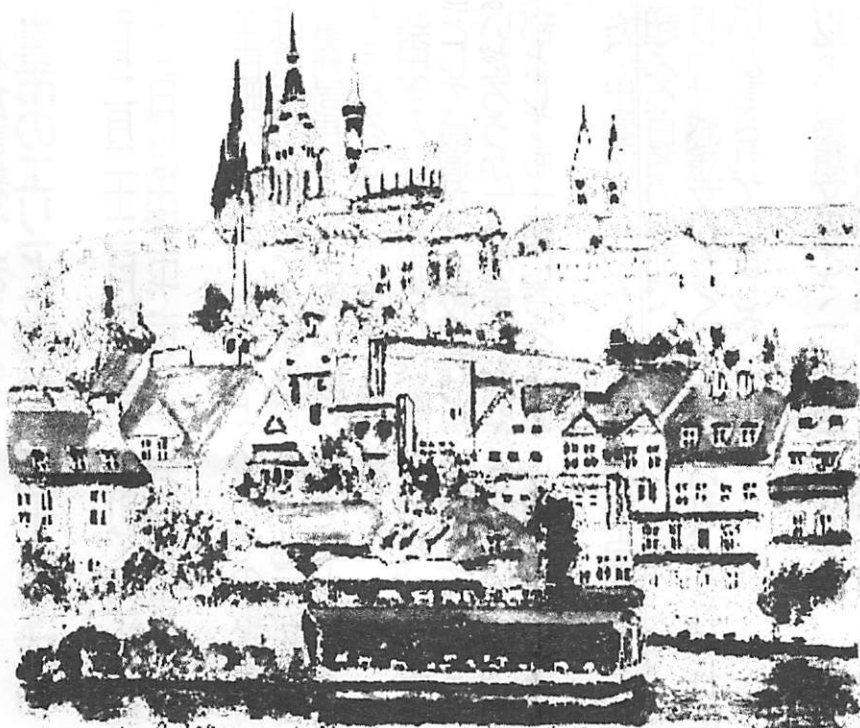


不屈



河津清氏提供 プラハにて

2024年3月

No・340号

治安維持法賠償

同盟島根県本部

〒693-0033

出雲市知井宮町

750-2

小玉信恵

☎・Fax

0853-23-3829

中国地方ブロック会議開催される

三月一日に中国地方ブロックの会長・事務局長会議が
出雲市で開催されました。

全体で十八名、島根からは五名が参加しました。
中央からは田中同盟事務局長から全国の動向の報告
があり、それを受け各県の状況が出されました。ひと
ころの現状維持的な状況から、会費拡大の分野で前進
があること。その起爆剤が「わが青春つきるとも」の
映画の上映が特徴であると言及されました。

島根からは大田・安来・松江に続き初めてエリア上
映として出雲市で二か所の上映が成功したこと。そして
今後、戦前の階級的な農民闘争の盛んだった県西部
地域での上映運動に取り組みつつあることも報告され
ました。

また、中国ブロックの「活動交流集会」が今年十月の
十四日、十五日に島根県松江市で開催されること、会
場の松江市むらこも会館（サンラポーむらこも）の会
場を確保していることも確認されました。

合わせて交流会の記念講演を島根県益田市の車龍寺住
職・前田賢龍氏に依頼していることが報告されました。
（氏は毎年熱心に、我が同盟の普及に取り組んでい
だっている方です。）

「わが青春つぎはとも」 出雲市のエリア上映が百四十名で成功

先月二月二十一日に出雲市平田町で四十名、翌日の二十三日には出雲市で百名と盛況となりました。

平田町の上映は、エリア上映としての取り組みとしては県内では初めての試みでした。地元の柴田さんと県事務局長・小玉さんが組をくんで二十軒近く訪問活動をするなど、下支えとなりました。

柴田さんは「素晴らしい映画だった。生きた歴史教育として最適だ。高校生などに鑑賞してもらう方がないだろうか」との思いを吐露されています。同盟県本部としても一緒に考えていこうとしています。

一方、出雲市（ビッグハート）では当初予想の八十名を超える百名の参加でした。

とりわけ感想文がたくさん寄せられ、それぞれに強い思いが記されていました。

「以下、感想文のごく一部を紹介します」

Aさん・あの時代辛かったでしょうね。想像以上に良い映画でした。平和な今をありがたく思います。

Bさん・伊藤千代子さんの存在を初めて知りました。若くて尊い命が時代の流れで失われたこととても残念です。プーチン政権のもと、先日亡くなったナワリヌイ氏に重ねて思われました。

Cさん・権力に負けない伊藤千代子さんに感動しました。今の世の中、強者が弱者をいじめる世の中になっちゃっている。今、平和が脅かされる時代になろうとしていると思います。私達は伊藤千代子さんの意思を継いでいく義務があります。その為にもこの映画をテレビや全国の一般の映画館で上映すべきだと思います。絶対に戦争などしてはならないー平和な世の中にしていきたいですー頑張ります！

『県西部で上映の企画続く』

先般、県の佐々木会長と原屋幹事で県西部のオルグに廻りました。以下概略のみ報告します。

江津市・六月十五日・会場 江津市総合市民センターにて 百名目標

邑智郡・美郷町、川本町、邑南町の三町のエリア上映として、六月二十日・八上交流センターにて 九十名目標

浜田市と周辺地域・三月八日に実行委員会（合わせて試写会も行う）を立ち上げ、七月のエリア上映を目指す。七十名目標

益田市・諸事情が重なり、九月ごろの上映を目指す

「軍歌と戦争」

投稿・斐川実吉

「治安維持法と現代」誌二十二年秋号の石子順氏の「歌は戦争を忘れない―古閑裕而と軍歌」を興味深く読んだ。筆者は私と同年代である。私が国民学校二年生の夏、戦争は終わった。生まれる前から中国との全面戦争が始まっており、八十名の同級生の名前の中で「勇」が二名、「勝子」さんが二人いて、さらに父親が戦死した遺児が六名もいた。

当時、戦争に関する次のような言葉を知っていた。爆弾三勇士、神風、予科練、赤トンボ（練習用軍機）、特攻隊などの言葉が子供の心に染みついていった。ある時、母に「オラア、特攻隊になる」と言ったことがある。ほめられることを期待していたのに、母の返事はまったくはかばかしい返事ではなかったので不審に思った。

戦争末期で「一億総特攻」と叫ばれ、現実には若者がどんどん特攻隊員として死んでいくので、母は私の言葉を単なる子供の夢としてでなく、かなり現実性の高いものとして受け止めていたかもしれない。

特攻隊が初めて出撃したのは、昭和十九年秋（終戦九か月前）だが、「初陣の栄（さかえ）」

を与えられたのは、神風特別攻撃隊の「敷島隊」の五名である。もともと、隊長自身もまだ二十三唯一の歳と若く妻帯者で新婚五ヶ月の妻を残していた。

「以下、次号掲載の予定です。編集部のお手間で掲載まで時間がかかりましたことをお詫びいたします。」



1942年 神風フェイスブックより

小玉 信恵 俳句と短歌

(正月に)

久しぶり 赤貝買つて 韓国産
 連れ合いが 寒くはないかと 尋ねけり
 スリッパで 夜中パタパタ 初叱り
 寒ざらし 鯉のぼりの色 彩(あざ) やかに

(能登地震によせて)

悲しいほど 星がきれいな 夜だった
 まるで 洗たく機の中に いるようだった

(ブギウギ)

もんぺでなく ドレスは 私の戦闘機
 啖呵切つたり ブルースの女王

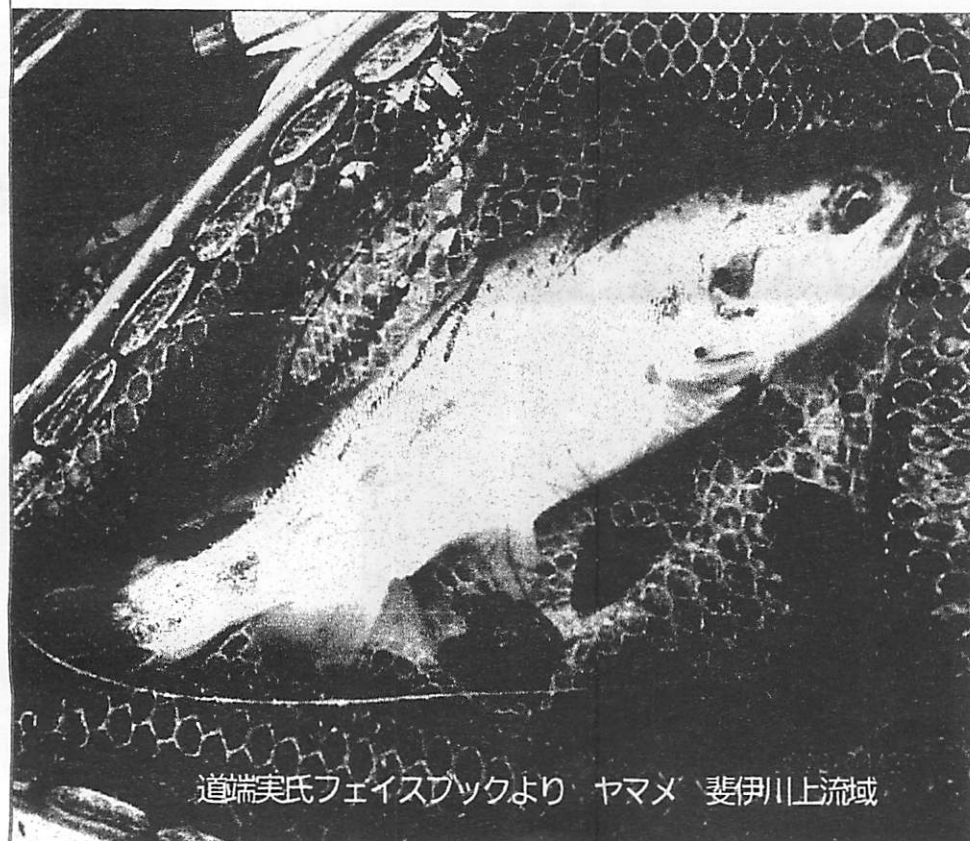
故・加藤嘉明氏 短歌 (昭和五十八年ころ)

雪の下に なりたる南天 いとおほしみ
 老い母は行く 日に何度も

一夜(ひとよ)さに 降り積もりたる 雪かきわけて
 梅の芽吹きを 妻と見にいきし

母の骨 父のかたへに 埋め終わり
 鶯(オウ)のやさしき 声をききたり

母逝きて 旬日(じゅんじつ)を経し 家のめぐり
 母の手植多し チューリップ咲く



道端実氏フェイスブックより ヤマメ 斐伊川上流域